

# Faculty Development Staff FD Report

vol. 8

## 学生FDスタッフ活動レポート 2014

### CONTENTS

- P.02 はじめに
- P.03 学生FDスタッフとは?
- P.04 授業アンケート企画 背景・歴史
- P.06 授業アンケート企画 教員インタビュー
- P.08 授業アンケート企画 座談会
- P.10 ピア・サポート連携企画  
*Assembly for Peer Supporters 2014*
- P.12 他大学交流

### 本冊子の刊行にあたって

この冊子は、教育開発推進機構が進めるFD活動に参加する学生FDスタッフと教育開発推進機構が協力し作成した冊子で、2014年度の学生FDスタッフ活動を中心に紹介しています。スタッフが取り組みを通じて得たもの、学生が大学や授業に対して感じていること、先生方が授業に対して持っている想い、授業への工夫を少しではありますが紹介しています。是非ごらんいただければ幸いです。

2015年3月 教育開発推進機構

### 2014年度学生FDスタッフ

社会学研究科	1回生	田中 翔
文学部	4回生	天野 伽映
産業社会学部	4回生	井上 範子
経済学部	4回生	森本 拓暢
政策科学部	3回生	加藤 雄一郎
文学部	3回生	黒羽 深季
文学部	3回生	田村 友里
産業社会学部	2回生	谷井 海斗



+R 未来を生みだす人になる  
立命館大学

RITSUMEIKAN

# はじめに



## WHAT'S FDS?



みなさんこんにちは！学生FDスタッフです。私たちは立命館大学の授業や教育改善を目的に様々な活動を行っている団体です。私たち学生にとっての身近な疑問を企画として立ち上げ、メンバーや教員・職員とが一体となって進めてきました。この冊子では2014年度に私たちが行った企画を紹介しています。どれも学生生活に大きくかかわりを持っていてとても興味深い内容になっていますので、是非ともページをめくってみてください。また、もしこれから紹介する企画や私たちの団体に興味を持ちましたら、気軽に私たちに連絡をしてみてください。あなたの知らない立命館がきっとみつかるはずです。

政策科学部3回生 2014年度 学生FDスタッフ代表 加藤 雄一郎

私たち学生FDスタッフは学生の視点から大学教育を良くしようと、学生・教員・職員の三位一体で活動をしています。今年度は学内に目を向けた企画に集中して取り組んできました。このFDSレポートにそれらの企画も含めた今年度の活動をまとめていますので、目を通して頂けたら幸いです。キーワードは「授業インタビュー」と「ピア・サポート」です。いずれも大学生活において身近なものなのではないでしょうか。「大学教育」と一口に言っても、授業だけにとらわれない様々な視点があると実感しました。来年度以降もその身近な視点を忘れずに、多様な切り口から活動を広げていきたいと考えています。

文学部 3回生 田村 友里



2014年度は学内での活動の活性化を目指して、「授業アンケート調査」と「ピア・サポート団体の連携」の2つをテーマに活動してきました。それぞれのチームが努力を重ね、学生FDスタッフとして、新しいステップを着実に積み重ねてきた1年でした。

今後も「学生らしい」視点での活動に重きを置いて、さらなる高度化と展開のため、共に高みを目指していきたいと思います。

### 教育開発支援課



# ■ 学生FDスタッフとは？

## ● 学生FDは立命で始まった

学生FDとは学生による教育改善活動のことであるが、もう少し定義めいた表現では、

「学生FDとは、授業や教育の改善に関心を持つ学生が、その改善のために学生自身が主体的に取り組む活動であり、大学側との連携を求めるものを指す。」

要するに、「教育改善」「学生主体」「大学との連携」がキーワードであるが、この活動を学生FDと名づけたのは、2007年に誕生した本学の学生FDスタッフ（以下、FDS）である。



2007年度第一期FDS



2009年夏の学生FDサミット（参加者99人）

## ● 全国に広がった学生FD

学生FDを全国に広げるきっかけとなったのは2008年の山形大学との学生交流で、他大学を知ることで自大学にないものを学ぶと同時に意識しなかった自大学の良さを知ったことである。教育改善のためにはもっと多くの他大学生との交流が必要だと感じたFDSの学生たちは2009年に学生FDサミットを本学で開催した。このサミットで学生FDは一気に全国の大学に広がり、今や80大学以上にまで及んでいる。サミットも最近では活動の活発な各地の大学で行われるようになり、昨夏の京都産業大学では参加者が480人に上った。

## ● 8年間の多様な取り組み

本学のFDSは本年度で8年目になるが、学内での活動も毎年、多様な取り組みを行ってきた。なかでもFDSの前身が2007年の「授業改善に取り組む学生ワーキング」であったことからもわかるように、FDSの最も大きな関心は授業改善であった。このためにFDSが続けてきたのは「授業インタビュー」という取り組みで、学生が望む授業とはどんなものかを冊子やWEBで発信してきた。さらに、それは教員インタビューや職員インタビューへと発展し、教育改善のためには教員・職員・学生の協働が不可欠であることをアピールしてきた。

また学生の視点を重視する取り組みとして始めた自由な話し合いの「しゃべり場」は学内だけでなくサミットで各大学にも広がった。ここでも学生だけではなく、教職員にも参加してもらうことで、教職学の協働で教育改善を進める文化の醸成を目指してきた。



2011年夏の学生FDサミット（参加者271人）

## 立命FDSへのエール

本学は13学部3万人以上の学生を擁する大規模な総合大学である。その中でFDSがやれることには限界があるが、学内にはピアソポーターをはじめ授業や教育に関する多数の様々な学生スタッフがいる。学生視点からの教育改善という目標に向かって学内の学生スタッフと連携して取り組むことができれば、学生FDの新たな一步を築くことができるであろう。

FDSとともに歩んできた私は今年で退職となるが、本学のFDSの更なる発展を期待したい。

学生FDスタッフ担当教員 共通教育推進機構 木野 茂



2012年に刊行した  
学生FDガイドブック



# 授業アンケート企画 背景・歴史

## 授業アンケート企画概要

担当／政策科学部 3回生	加藤 雄一郎
文学部 4回生	天野 伽映
社会学研究科 1回生	田中 翔

私たち学生は普段から授業アンケートに回答している。ではこの授業アンケートが「何のために」「いつごろから」「どう私たち学生に還元されているのか」わかるだろうか？私たちは授業アンケートに対する素朴な疑問からこの企画を立ち上げ、進めていった。

①まず、導入の経緯・背景について担当職員へインタビューを行った。ここで授業アンケートの歴史や、普段私たちが答えた後どのように処理されているのかなど、授業アンケートの基本を学んだ。

②次に行ったのが「教員インタビュー」である。前述の職員へのインタビューでは、授業アンケートがどのように処理されて講義を担当する教員の手元まで戻るかは明らかになったが、実際にそれを受け取った教員がどう扱うかまではわからなかった。そこで、教員にインタビューを行い、どのように授業アンケート結果を活用しているのかを調査した。

③最後に行ったのが「座談会」である。教員インタビューを通して私たちが実感したのは「授業アンケートを活用している教員が少ない」ということだった。そして「授業アンケートの意義は達成されているのか」「何か課題があるのではないか」こういった疑問が出てきたのである。そこで行ったのが座談会「理想的な授業アンケートって何？」であった。授業アンケートに携わっている教職員と、それぞれの立場から授業アンケートの現状や課題、これからについて話し合った。そして「授業アンケートをもっと有効に活用する方法」について話し合うことができた。

この企画を通して私たちは、授業アンケートの基礎やその意義、活用の現状も知ることができた。さらに、アンケートについての疑問を学生・教員・職員が同じ机を囲んで話し合い、深めるという今までにない企画を行うに至った。ここでは「理想的な授業アンケートって何？」というテーマをきっかけに、「今ある授業アンケートをどうしたらもっと活用できるのか」という形で議論が深まり、授業アンケートのこれからについて考えることができた。

次からはこれらの取り組みについて詳しく内容を紹介していく。



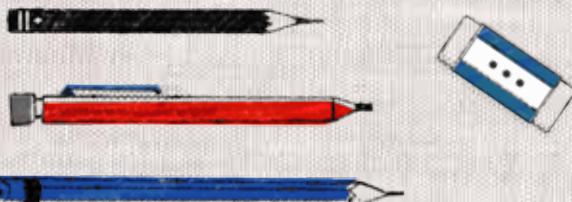
## 授業アンケートレポート

# 授業アンケートって何？

現在、立命館大学の授業アンケートは「授業改善」を主な目的として行われており、よりよい授業づくりのために役立てられている。授業アンケートは2013度までは各セメスターの第13週・第14週に実施されていたが、2014年度からは第13週から第15週の間に実施が可能になった。また将来的には授業アンケートのWeb化が検討されている。授業アンケートが実施されている授業の割合は立命館大学で開講されている授業全体の約90%である。質問内容は基本質問6つをベースに学部や授業内容などによって14種類に分けられている。質問文の特徴として日本語と英語の併記がある。これは留学生の在籍や英語のカリキュラムが用意されているためであり、グローバル化への対応を意識したものだ。また授業アンケートの結果は公開されることが原則とされている。現在の授業アンケート結果の公開方法としては、各学部事務室などに置かれている報告書冊子や立命館大学 教育開発推進機構のホームページでの公開がある。

## HISTORY

- 1995年度 全学協議会などにおいて、アンケートによる授業改善の必要性が議論される
- 2001年度 全学統一の授業アンケート実施開始
- 2003年度 後期 「教学検証」と「授業改善」を主な目的と定められる
- 2006年度 後期 ● 主な目的が「授業改善」になり、その目的に合わせ質問文などが大幅な改定  
● 「教学検証」に関する質問項目を削除（「教学検証」に関しては学びの実態調査にその役割を移行）  
● アンケート実施時期を第13・14週に変更  
● インタラクティブシートの導入
- 2011年度 ● 更なる質問項目の厳選  
● 独自質問の導入  
● 自由記述欄の削除
- 2014年度 ● 「学习到達度と学习時間」に焦点をあてた質問項目に変更  
● 自由記述欄の復活
- 将来 授業アンケートのWeb化の導入





## 現在の授業アンケートの流れ



## 学生FDスタッフからみたこれからの課題

授業アンケートの仕様決定



アンケート用紙納品



アンケート実施  
(13~15週目)



アンケート回収



アンケート集計・個票作成



教員へフィードバック

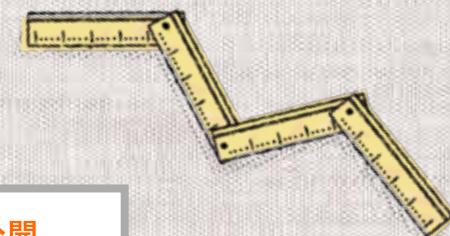
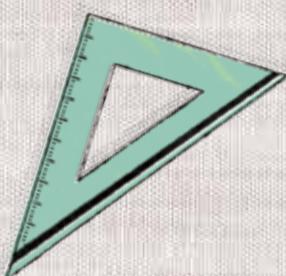
個票送付  
【アンケート実施から1.5ヶ月後】



教員からのコメント集約



分析・報告書作成  
ホームページ等での公開



大きな課題として、学生への結果のフィードバックに時間がかかることがあげられる。図のとおり、アンケート実施後から結果が出るまでに様々な作業を経ているため、時間がかかってしまうのが現状である。そのため、結果のフィードバックまでの時間を短縮することで学生のフィードバックへの関心を維持・高める必要がある。そこで検討されているのがアンケートのWeb化である。Web化によって、授業中にアンケートを実施してその場で結果をすぐに見ることができるようになる。フィードバックの即時性が実現すればアンケートに答える学生にとってアンケートが自分に関係あるものであるという認識が広がっていくかもしれない。

# 授業アンケート企画 教員インタビュー

## 教員インタビューとは？

前頁で授業アンケートが教員の手元に戻ってくるまでは調べられた。ここでは、さらに踏み込んでその授業アンケート結果を教員がどのように活用しているかをインタビューした。

Interview  
01

### コミュニケーションペーパーを活用する

先生のお名前 石原 直紀 先生  
主な担当科目 國際連合入門

先生の所属学部 國際関係学部  
インタビュー 田中 翔

- A1. 授業アンケートの結果は適宜参考にしています。授業アンケートを行っていることに意味があると思っています。
- A2. 毎回の授業で授業に関係があることをコミュニケーションペーパーに書いてもらっています。その中で理解度などをみています。学生はそれ以外にも授業に関係することも書いてくれるので、それを授業内容に反映させています。

Interview  
03

### ”視聴率”のとれる授業のためになにができるのか

先生のお名前 仲山 豊秋 先生  
主な担当科目 言語表現概論

先生の所属学部 文学部  
インタビュー 加藤 雄一郎

- A1. 「話に集中してもらうためにはどのような工夫があるのか」を考えながら授業を進めています。これまで、その手掛かりとしてアンケートの自由記述欄に書かれた「学生の声」を参考にしてきました。現在、文学部では、自由記述欄を実施していないことが残念です。
- A2. 学生の生きた声を聞くために、コミュニケーションペーパーを活用しています。教員が気づかなかったことや授業への要望、疑問について正直に書かれていることが多く、参考になります。以前、授業で使う資料が古いのではないかという指摘を受けて、すぐに新しいものに差し替えたことがあります。

## Question

- Q1. 先生の授業の中でどのように授業アンケート結果を活用していらっしゃいますか？
- Q2. 学生の声を集めるために独自の方法を活用していらっしゃいますか？

Interview  
02

### 実際の授業中からも学生の声を聞く

先生のお名前 永橋 爲介 先生  
主な担当科目 環境形成論

先生の所属学部 産業社会学部  
インタビュー 田中 翔

- A1. 各項目の評価結果が平均値より高ければ、授業運営に関してそれほど大きな間違いはないのかな、ということを確認しています。平均値より低ければ、その項目に改善の余地ありだと思っていますが、今迄のところ平均値を下回ったことはありません。
- A2. 每回の授業内でコミュニケーションペーパーを配布しています。あるテーマを設定しそれについて学生同士で話し合ったり、全体に発表してもらいます。またわたしがそれについてフィードバックを行うこともあります。場合によっては授業内容を変えていくこともあります。

Interview  
04

### 授業形態が変われば学生の声の聞き方も変わる

先生のお名前 稲田 康宏 先生  
主な担当科目 分析化学I

先生の所属学部 生命科学部  
インタビュー 田中 翔

- A1. 受講生に結果を公開していますが、アンケートの質問内容が一般的すぎるので、そこから何かをすることは行っていません。
- A2. 授業アンケートに独自質問を設定する場合があります。講義科目的場合は毎回の授業で質問や意見などを学生に書いてもらっています。それに対して、できる限り次の授業中で返答しています。実験科目的場合は、コミュニケーションペーパー等は使用せず、直接対話しています。



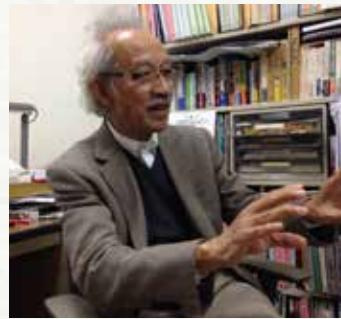
Interview  
05

## さまざまな方法で 学生の声を聞く

先生のお名前 **木野 茂 先生**  
主な担当科目 **科学的な見方・考え方**

先生の所属学部 **共通教育推進機構**  
インタビュアー **田中 翔**

- A1.** 実施が授業の最後に近いので利用のしようがありません。せいぜい次の年の授業のときに見直すくらいです。ただ、自由記述欄は参考にさせてもらっています。ここ数年はありませんでしたが、今年から復活していますね。僕の場合は学生にフィードバックするために自由記述欄には名前を書いてもらっています。



- A2.** 独自アンケートは1回目の授業と最後の授業の2回行っています。一回目では受講の動機や受講に必要な経験やスキルがあるかどうかを聞いています。最後に行うのは振り返りです。受講生に伝わったことや感じたことを聞いて、それを次年度に活かしています。学生の声は、学修支援ツール(manaba+R)で日常的に聞くようにしています。

Interview  
06

## 毎年異なる学生に 異なる対応を

先生のお名前 **金森 絵里 先生**  
主な担当科目 **会計学**

先生の所属学部 **経営学部**  
インタビュアー **天野 伽映**

- A1.** 特に参考にするのは授業外学習時間などです。学習時間が少ないと宿題を多く出そうかなとか考えますね。しかし授業アンケートはセメスターの最後に行いますから、どうしても今年の授業に対する評価を後から学生に教えてもらう、というかたちになります。今年の学生にオンラインで対応できないという点でどうしても授業の中での活用は限られてしまいますね。

- A2.** コミュニケーションペーパーを学期中に2回使っています。1回目は学生がどんな背景を持っていてどんなことに興味関心があるかを聞きます。2回目は中盤くらいに授業に対しての意見を聞いています。全部に応えることはできませんがそれらを授業内で取り上げることで学生の意見を拾っています。やはり毎年毎年で傾向は違いますし、留学生がいるかどうかによっても授業の展開の仕方を変えたりしますね。



### インタビュアーの感想

学生の意見に耳を傾け、真摯にひとつひとつの授業に向かう姿勢を強く感じました。お話を伺う中で、実際に先生の授業を受けてみたかったと思いました。

文学部 4回生 天野 伽映

先生は熱心に学生の声を集めようと努力なさっていて、そのことをとても熱く語ってくださいました。授業アンケートそのもので授業を改善するのは難しいのではないかとの意見を個人的に持ちました。

政策科学部 3回生 加藤 雄一郎

インタビューを行ったどの先生も方法の違いがあるとはいえ、授業アンケート以外に何らかの方法で学生の声を聞いていらっしゃることが分かった。現状では授業アンケートの活用方法が少ないのだろうと感じた。

社会学研究科 1回生 田中 翔



# 授業アンケート企画 座談会

授業アンケートについてのふたつのインタビュー調査を経て私たちが感じたのは「先生は授業アンケート結果をあまり活用していない」ということだった。そこで私たちに「授業アンケートの意義は達成されているのか」「何か課題があるのではないか」という疑問が浮かんだのである。この疑問について、是非授業アンケートに携わっておられる教職員と私たち学生スタッフとでそれぞれの立場から意見交換をしたいと考えて行われたのが本座談会企画「理想的な授業アンケートって何?」である。

## 座談会参加者

学生FDスタッフ 加藤 雄一郎  
田中 翔  
井上 範子

教 員 安岡 高志先生  
(教育開発推進機構、授業アンケート担当)  
木野 茂先生  
(共通教育推進機構、学生FDスタッフ担当教員、  
(2006年~2011年度 授業アンケート担当)

職 員 小野 勝大さん(教育開発支援課)  
岡田 航洋さん(教育開発支援課)

## 座談会プログラム

### 1.目的・趣旨説明

### 2.授業アンケートの意義・本学での現状についての確認

- 授業アンケートの意義や現状について小野さんより報告
- 授業アンケートについて集まった教員の意見を岡田さんより報告
- FDスタッフが「教員インタビュー」で集めた教員の意見を報告

### 3.座談会

- 授業アンケートについてそれぞれの立場から見える「課題」を出し合う。
- 出し合った課題を踏まえ、これらをどのように捉えるかも含めて、「理想的な授業アンケート」について話し合う。

### 4.参加者の感想・総括



## 1.目的・趣旨説明

座談会の目的と趣旨について確認した。本企画では授業アンケートについての課題を運用に携わっておられる教職員と学生スタッフのそれぞれの立場から共有する。そしてその上でまず授業アンケートへの認識を互いに知り、そしてこれからの授業アンケートについて三者で共に考えることを目的にした。

## 2.授業アンケートの意義・本学での現状についての確認

座談会へ入る前に前提知識を共有した。担当職員の小野さんから授業アンケートの概要や2014年度からの変更について説明があった。岡田さんは変更に伴って「アンケートの内容が全学共通であるため、教員個人のFDには利用できない」、「結果がすぐにフィードバックされればモチベーション向上に繋がる」など、教員から直接寄せられた声をご紹介いただいた。次に学生FDスタッフより、「教員インタビュー」で得た教員の授業アンケート活用実態についての報告を行った。内容としては前掲の「教員インタビュー」記事の内容を要約したものであり、「教員がアンケート結果をあまり活用していない」ということである。

## 3.座談会



座談会ではそれぞれの立場から考える授業アンケートの「課題」をポストイットに書いて模造紙に貼るというワークを行った。学生・教員・職員という異なった立場であったため、様々な視点から多様な課題が挙げられた。①入学時の習慣づけの不足②組織文化としての閉鎖性③アンケート結果へのアクセスのしにくさ④学生へのフィードバックの遅さが主なものであった。

以上のような課題がそれぞれ出され、次にではどのようにすればこれらの課題が解決されるのかについて意見が交わされた。その中でも③アンケート結果へのアクセスのしにくさや④学生へのフィードバックの遅さについては活発に意見が交わされた。

③アンケート結果へのアクセスのしにくさについては、改善の余地があり、この改善が授業アンケートの活性化につながるとの意見が大勢であった。学生がアクセスしやすいような仕組みを整えるべきという意見が多く、学生スタッフからは「アンケート結果ポータルサイト」のようなものを作成し、教員別に授業アンケート結果を表示できるようにして学生が簡単にアクセスできるようにしたらどうかなどの意見が出た。

一方、その情報が良い授業探しというよりも授業外勉強時間の少なさを基準に授業を選択するためなどといった、本来の意図とは違った





形で利用されてしまうのではないかとの懸念の声も挙がった。

④学生へのフィードバックの遅さについては、現在試験的に始まっている「授業アンケートのWeb化」によって解決できるのではないかとの意見が出た。Web版授業アンケートでは、回答するとすぐにその結果を教員が閲覧することができるためフィードバックの迅速化が可能になるとされている。しかしながら、これは学生が自らインターネットに接続して答える形態のものであるため、きちんとした告知やインセンティブを与えなければ回答が集められないのではないかとの声も挙がった。



また、中間でのインタラクティビティシートを活用して授業が改善されたかどうかを授業アンケートで確かめることや、「manaba+R」の掲示板機能等を上手く活用すれば学生の声が日常的に集められるとの教員の意見もあった。全体としては、フィードバックはなるべく早いほうがよく、そのための工夫を行っていく必要があるとの認識が大勢であった。



はなるべく早いほうがよく、そのための工夫を行っていく必要があるとの認識が大勢であった。

## 4. 参加者の感想・総括

学生からは現存の授業アンケートをいかに活用するかということが重要であり、そのためには「アクセスのしやすさ」がキーポイントになることが挙げられた。さらにはWeb化を進める上の課題を確認することができてよかったとの意見が職員から出た。教員からは、授業アンケートを考えていく過程に学生が入ることが、よりよい授業アンケートの活用やその活性化に貢献するのではないかとの声が挙がった。

全体の共通認識としては、授業アンケートというテーマについて学生・教員・職員3者が一堂に会して話し合うという機会 자체が初めての試みで、このような意見交換が授業アンケートを考えいくうえで重要なことだった。そしてこの過程が立命館大学における「理想的な授業アンケート」につながるとの認識を得て座談会は終了した。

以上のように、教職員と学生FDスタッフ三者が考える授業アンケートの課題を共有し、これから授業アンケートの在り方やよりよい運用方法について議論を交わすことができた。

### 学生FDスタッフの感想

普段私たちが何気なく回答している授業アンケートの中にも、いろいろな思いや、その思いを引き出すために、私たちが思っているよりも多くの工夫や試行を教職員の方々が考えていると知り、とても驚きました。授業改善において様々な可能性を持つ授業アンケートについて、もっと多くの人々に知ってもらいたいと思いました。

産業社会学部 4回生 井上 範子

今回教職学で意見交換を行って感じたことは、授業アンケートと学生との距離感がまだまだあるというのが現状だということだ。このことは一朝一夕に改善していくとは考えにくいが今回の座談会でこのことが再認識できてよかったと思う。このような機会は今回だけではなくこれからも続けていってほしい。

社会学研究科 1回生 田中 翔

# ピア・サポート連携企画 Assembly for Peer Supporters 2014

## 概要

立命館大学では3000名以上の学生がピア・サポート活動に携わっている。ピア・サポート同一士のつながりの創出を目的に、2013年度に開催されたAssembly For Peer Supporters(以下APS)では、ピア・サポート団体の連携が活動の質を高めるために必要だという気付きを得た。しかし、ピア・サポート団体とその活動に関する情報は学内に点在しており、団体同士の連携が行われていないのが実態だ。充実したサポート体制をより活用するため、それぞれのピア・サポート団体を紹介する資料を作成することでこの課題を解決することができると考えた。

今年度は学生FDスタッフがAPSの運営を担い、団体間の具体的な連携方法としてのツールの作成を目指した。ピア・サポート団体の全体図を俯瞰する「ピア・サポートマップ」と、各団体の活動を詳しく紹介する「プロフィール冊子」である。以下の12のピア・サポート団体と共に3回のワークショップを通してツールを作成し、これらを活用した具体的な連携案をピア・サポートーたちと模索した。

## 担当／

文学部 3回生

田村 友里

産業社会学部 4回生

井上 範子

## 参加団体

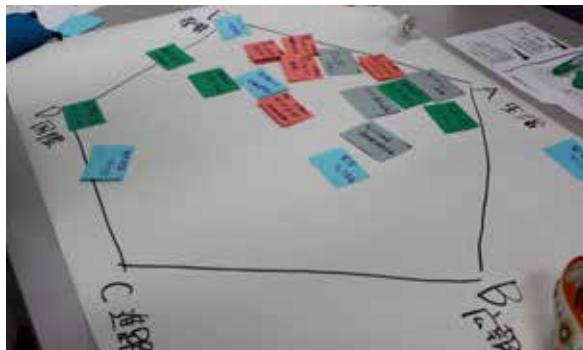
- |                            |                   |                 |
|----------------------------|-------------------|-----------------|
| ● オリター(文学部・経営学部・生命科学部・薬学部) | ● 学生広報スタッフ        | ● 学生コーディネーター    |
| ● ジュニア・アドバイザー(JA)          | ● 障害学生支援室サポートスタッフ | ● GGP学生支援団体まいる  |
| ● 産業社会学部デジタル工房スタッフD-Plus   | ● 入試広報学生スタッフ      | ● ライブラリースタッフ    |
| ● 留学アドバイザー                 | ● 留学生チューターTISA    | ● RAINBOW STAFF |

2014年10月28日(火)

## 第1回ワークショップ

### 全体図を「俯瞰する」

参加者それぞれによる団体の活動紹介から始まった。その後、団体の活動内容を「生活・広報・進路・国際・学習」の5項目に分類し、図として可視化できるように五角形のチャートにあてはめた。これが「ピア・サポートマップ」の土台となる。他団体の活動を知るだけでなく、自団体の活動を再認識する機会ともなった。



2014年11月14日(金)

## 第2回ワークショップ

### 活動を「知る」

前回作成したチャートを整理し、「ピア・サポートマップ」をより見やすく、連携に活用できるものにするためにどう改善すべきかが話し合われた。

ピア・サポート団体の活動内容をより詳しく紹介し、連携のきっかけとなるための「プロフィール冊子」の作成を検討した。サポート対象・活動場所といった基本情報や、活動理念・主な活動内容に加え、「GIVE」「TAKE」の項目を取り入れた。「GIVE」とは、その団体の強みであるスキルや活動内容、「TAKE」はその団体に不足しているスキルや、他団体と協力したい活動などとした。この2つの項目によって、連携の糸口がつかみやすくなると考えた。



2014年11月28日(金)

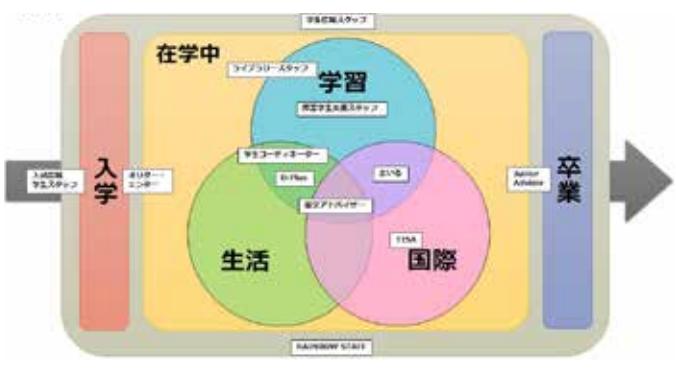
## 第3回ワークショップ

## 他団体と「連携する」

「ピア・サポートマップ」が完成した。時系列として「入学」「在学中」「卒業」の3点に分け、在学中の支援として「学習」「国際」「生活」の3分類を組み込んだ。「進路」は「卒業」に、「広報」は大学生活全体で関わる活動であるため3つの時系列を包括する枠にそれぞれ吸収した。そこに、第1回で行った活動分類をもとに団体をあてはめたものである。第2回終了後、各団体にプロフィールの記入をしてもらい、「プロフィール冊子」も完成した。

参加したピア・サポート団体が4グループに分かれ、「ピア・サポートマップ」と「プロフィール冊子」を活用しつつ具体的な連携のアイディアとなる企画を考案してもらった(表参照)。中には実現に向けてプロジェクトチームを結成し動き始めているグループもあり、これから動向に期待が持てる取り組みとなった。

企画タイトル	メンバー
新入生、壁を越えて仲良くなろうぜ!(Beyond Borders)	<ul style="list-style-type: none"> <li>● オリター(文学部)</li> <li>● 留学生チューターTISA</li> <li>● GGP学生支援団体まいりん</li> <li>● ジュニア・アドバイザー(JA)</li> </ul>
ピアサポ1日体験ツアー	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 学生広報スタッフ</li> <li>● 留学アドバイザー</li> <li>● RAINBOW STAFF</li> </ul>
Insightful Open Campus (より充実した オープンキャンパスを作ろう)	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 入試広報学生スタッフ</li> <li>● 障害学生支援室サポートスタッフ</li> <li>● ライブリースタッフ</li> </ul>
ボランティアで やりたいことみつけよう!	<ul style="list-style-type: none"> <li>● オリター(経営学部)</li> <li>● 学生コーディネーター</li> <li>● 産業社会学部デジタル工房スタッフD-Plus</li> </ul>



## FDSのこれから

## まとめ

学生FDスタッフがAPS2014に運営スタッフとして関わったことはピア・サポートの活性化、ひいては立命館大学の教育改善に結びつく活動であると言える。ピア・サポート同士だけでなく、ピア・サポートと学生FDスタッフが連携し、相乗効果で活動の幅が広がっていくことも期待できる。その上で、ピア・サポート団体の単なる取りまとめ役になるのではなく、学生FDスタッフの理念に合ったつながりを形成していくことが求められる。各団体の活動において「大学教育改善」の視点を見つけて連携していくながら、学生FDスタッフ自身の活動も活性化していかなければならぬ。

## 感想

学生FDスタッフが成し遂げたい目標とAPSの目的が合致し、半年間を通じて行われた本企画。初めて経験することも多く、運営にあたって戸惑うことや悩むこともたくさんあった。しかし、学生であるピア・サポート団体が集う場を、私たち学生FDスタッフが企画することで、より学生目線の意見を聞きだすことができたのではないかと感じている。来年度以降も今回で得たつながりを、より大学の教育改善に活かしていくよう努めたい。

産業社会学部 4回生 井上 範子

2014年12月18日(木)

教学実践フォーラム  
「Assembly for Peer Supporters 2014」

取り組みの集大成として、APS2013から2014にかけての成果について報告を行った。学内だけではなく学外から多くの学生・教職員が集まり、全国的なピア・サポート活動への関心の高さが伺えた。フロアからは他団体とのつながりを継承する体制をいかに構築していくのかという指摘や、団体をまたいでピア・サポート者が交流しやすい場を提供することが有益なのではないかという意見が出た。そこから、継続的な連携体制を確立するために、APSの実行事務局の設立という形を見出した。



## APSのこれから

## まとめ

現段階における連携の可能性を探り、既存の枠組みの中での連携案について話し合うことができた。しかし、2014年12月18日の報告会で持続可能性が大きな課題として残された。事実としてAPS2014では、現存する組織同士が連携することで何が生まれるか、というテーマに集中しており、それらを体系化し継続する方法については言及されていなかった。そこで、APSの実行事務局設置が提案されている。具体的にどのような役割を担い機能させるかについての議論を深めるため、2015年2月6日(金)に事後勉強会が開催された。事務局の設置や連携の施策について、団体間での統一見解や意識の共有を促進することを大きなねらいとした。事務局の役割や仕組み、設置することのメリット・デメリットが話し合われたが、結論を一点に集約するのは困難であった。今年度の参加者を中心に来年度以降も議論していきたい。

# 他大学交流

2014年8月23日(土)、24日(日) 京都産業大学

## 学生FDサミット2014夏ーあなたがキヅク未来ー

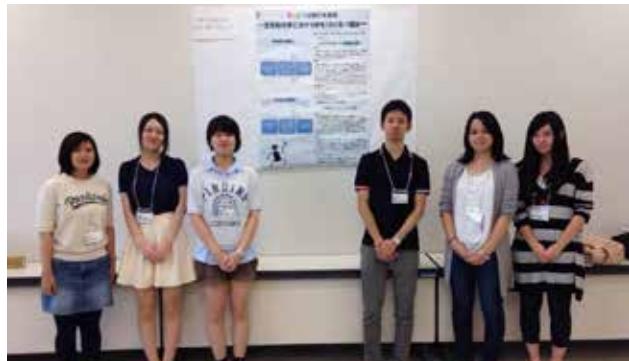
2014年8月に京都産業大学にて開催された「学生FDサミット2014夏」に参加した。このサミットとは、全国の大学で活躍する学生FDスタッフや教職員が一同に会し、お互いを高め合ったり、これから的学生FDを考えたりする場である。今回は京都産業大学学生FDスタッフ「AC燐」の主催で開催された。

1日目には各団体の活動を互いに紹介しあう「ポスターセッション」と、教職学で一緒に話し合う「しゃべり場」が行われた。ポスターセッションでは、私達が発表すると同時に他大学の取り組みについて深く知ることができた。特に結果まできちんとつなげる他大学の活動を見て、私たちもきちんと企画を最後までやり切りアウトプットすることの重要性を痛感した。しゃべり場は「私たちが大学を良くするために何ができるか」というテーマのもとに行われ、それぞれ立場の違う教職員や環境の違う他大学の学生と活発に意見交換することができた。私たちのグループでは、活動の幅で悩むことの多い学生FDはどのように大学内で活動を展開すべきかについて盛り上がり、最終的に個人として何ができるかまでブレークダウンできた。

2日目は分科会が主イベントとして行われた。様々な分科会が行われる中、私は「学生FDスタッフ七転び八起記」と銘打った分科会に登壇した。この分科会では活動する上での課題を登壇者が発表し、それを話題として会場の参加者同士が議論するというものであった。私は学生FDスタッフを立ち上げた先輩たちが引退したあの世代としての悩みを発

表し会場の同じような悩みをもった参加者から共感をいただいた。全体としては議論が活発に行われ、これからの活動を行う上での課題をシェアすることができた。

以上2日間を通して私たちは、他大学の状況を知るだけでなく、今までの自団体の活動を見つめなおしこれからの活動について考える場とすることができた。



政策科学部 3回生 加藤 雄一郎

2014年9月13日(土)、14日(日) 岡山大学

## 教育改善学生交流ワークショップi\*See 2014

全日本授業評価アンケート決定戦!～形だけのアンケートから、機能するアンケートへ～

2014年9月に岡山大学にて開催された、教育改善学生交流ワークショップ(i\*See)に参加した。i\*Seeは、「本学の学生・教職員教育改善専門委員会が主催する学生参画型FDのフォーラムであり、学生を主体として大学間を越えた広い視点で大学における教育の改善を目指して2004年より毎年開催して」いるものである(岡山大学教育開発センターホームページより引用)。

今年は25大学から101名が参加した。テーマは「全日本授業評価アンケート決定戦!」で、一番よい授業評価アンケートを決めるというものであった。

1日目は開会式、アイスブレイク、全体議論、懇親会が行われた。全体議論は各参加大学の授業評価アンケートをみて、どれが一番よいかということをトーナメント形式で決めるものであった。判断基準は個人の主観であり予め決められていたものではなかった。

2日目はグループ議論、報告会、閉会式が行われた。グループ議論は割り当てられた大学の授業評価アンケートをさらによくなるようにするためにどうすればよいかということを話し合うもので、そこで話し合われた改善内容を報告会で全体共有した。またその改善内容がよいか否かの投票も行った。

今まで授業アンケート企画内で自大学のものについて考えたことは



あったが、他大学との比較など客観的に考えたことはなかった。他大学と比較することで自大学の授業アンケートの特徴を理解することにつながった。

社会学研究科 1回生 田中 翔



立命館大学 教育開発推進機構

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1 TEL:075-465-8304 FAX:075-465-8318 e-mail:fd71cer@st.ritsumei.ac.jp  
<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/ac/itl/index.html>